# 平原君

藤田德太郎

平原君は當代第一の明主としてその名聲は諸邦にあまねく傳へられた。他國では官吏の苛斂誅求や盜賊の横行跋扈に多くの人民が苦しめられてゐるのに、此の國にはそうした噂さへ塵程も起らなかつた。人民は何れも生業に安んじて日々の生活を樂んでゐた。日方の口々からは此の明君の下に幸福な生活を送らうとして毎日數多の人が國内に移住して來た。其らの人々の中には百姓や商人や劍客や武人や學者や宰相やあらゆる階級の人が交つてゐた。そして百姓には土地が、商人には家屋が、劍客や武人にもその技藝に應じて銘々相當の位置が與へられた。學者や宰相は殊に重く用ゐられて多くの人から尊敬を受けた。誰れも皆平原君の德に服してその一擧一動にも群臣は多くの感激をうけるのであつた。主君の温和な美くしい容貌や、優しい併し何處にか威嚴のある聲音に接するのは彼等に取つて最も喜こばしい事であつた。すべての人がその職掌にたづさはるのを眞から生甲斐のある嬉しい事に思つた。かくして人々は幸福な生活を享樂して年のたつのを忘れてゐた。歡喜と光明とが國内の隅々迄も滿ち溢れてゐた。

平原君は眞面目な篤實な君主であつた。そして何ちらかといふと小心翼々と云つた風があつた。彼はすべて

治世に關する事はこまゞしい所迄氣をつけなければ氣がすまなかつた。盜賊一人を處罰するのにもひどく頭腦を使ふやうな事があつた。彼には如何なるものもおろそかでなかつた。賤しい宮中の使丁のやうなものに至る迄よくその名を覺へ込んでゐた。此んな事が臣下の者をして一層彼に敬服させ、且つ親ませるのであつた。彼に仕へたいと希望するものが毎日何人か宮城にやつて來た。彼は其等の者を自ら人物試驗を行つて宮中に置いた。又その選に洩れたものでも失望する事のないやうに色々云ひ慰めて歸してやつた。こうして毎日幾人かの人が宮中に增し加らへれた。そして今はその數が千を以つて數へる程にもなつてゐた。

或る春の日の午後。一人の美くしい女が二三人の侍女と共に宮城内で一番高い櫓の上に登つて、春の景色を心ゆく許り眺めてゐた。女は傍の侍女の肩によりかゝりながら、丁度夢でも見てゐるやうに美くしい眼をうつとりどさせて遠くに眺め入るのであつた。

太陽は和らかい光りを野邊にも町にも降らせてゐた。乳のやうな霞が郊外の野原にふわりと棚引いてゐた長閑な春の香りは至る所に高く感じられた。

野原が遠く迄續いて活々とした新鮮な綠が眼にすがゝしい。その透明な淺綠に日の光りが和かく照り返へして一層艶が增して見ゐる。所々に二三本づゝ一團になつて立つてゐる桃の木には未だ蕾がちの花が赤く咲いて綠の野と對照してあざやかである。あなたこなたに放つてある牛の草をしきりに食つてゐるのや、のそ〳〵歩き廻つてゐるのが如何にも春らしい感じを與へる。時々その牛の聲がにぶく空氣をゆるがせて、長く尾を引いて聞ゐる。野原のあなたはこんもりとした森で、濃い綠色がぽつかり浮いて見ゐる。薄い霞の棚引いてゐる事がその部分だけはつきりわかる。遠く空の色とまがふ許りに薄く可成り高い山が影のやうに空

をそめてゐる。直ぐ手前、此の高樓から眺める時は足元のやうに見ゐる宮門の前にはさゝやかな小川の流れるとも見ゐないのがちら〳〵日光を照り返へして、遠くの方に眼を放つてゐても何うかするとその方が見下される。川の向岸には桃がまばらに植はつて、つやゝかな和かい感じのする赤色が、清く澄んでゐる水面にかすかに投じて、時々立つ小波の爲めにかき亂されるのが美くしい。桃の間に柳が所々に立つてゐる。その細くしなやかないゝ恰好をして水面に垂れてゐる枝にも青く新芽がふき出して人の眼に快い刺激を與へるのである。すべてがのび〳〵とするやうな和かい暖かい春の色で描かれてゐる。空氣も何となくねばつてゐるやうで、何處からか甘い香りを運んで來る。こうしてぢつと春の空氣の中に浸つてゐると心も何んとなく落ちついていつかのどかな夢の中に包まれてしまふやうである。

「もうすつかり春らしくなつた。柳も芽ぐんでゐるし、桃は咲いてゐるし……あの野原の美くしい事！ほら人が一人牛を引いて野を歩いてゐる。全く繪のやうだ。」

女は一人言のやうに云つた。

「さやうでございます。時候と云ひ、景色と云ひ、遊ぶにつけましても、仕事を致しますにつけても、一年中で春程樂しい時はございません」

侍女の一人がさゝやくやうにこう答へた。

「私ネ、春になるといつもそう思ふの。あの寒い冬の間私達の心は何か慰められないやうなすさまじい心に閉じこめられてゐるけれども、こうして春になると丁度小鳥が籠から放たれたやうな嬉しい氣持になつてほんとに生きてゐる甲斐があるつてそして私達は此の春のやうに和かい優しい心を持つて生きて行かなけ

ればならないつてネ。」

「ハイ、私達もいつもそう思つて居ります。殊におやさしいあなたさまのお傍にお仕へ申して居りますので一層おあやかり申したい思ひますので！。」

女は又默つてぢつと下の方を見つめた。川水は日の光りをにぶく照り返へしながら靜かに流れてゐる。岸邊を逍遙する人のかげも見ない。すべてが靜かである。と彼女の眼には異樣な物が寫つた。腰を地上に落して、身体を海老のやうに押しまげて、兩足の間に頭を突つ込んで、兩方の手を力にして調子を取つてはゐざつて歩く不具者が一人今赤や黄で採られた美くしい宮門を出て行くのである。手に力を入れる拍子に上半身が上に伸び上り腰が浮いて一足前に進むと今度は手をゆるめて又頭を足の間に折曲げ一寸休んで又前のやうに繰り返へしてはのろ〳〵と進んでゆく。その有樣が如何にも滑稽だつたので女は兩手で口を蔽ふて笑を噛みころした。不具者は首から顎の直ぐ下に壺を下げてゐた。そして上半身を臥す度に壺は地とすれあつていやな音がした。川に水を汲みに行こうとするのである。そして上から女の見て居る事も知らないで一生懸命にゐざり歩いてゐる。やがてやう〳〵の事で岸邊に近づいた時石の角にでも當つたのであろう。不具者が頭を下げる拍子に、がちんと音がして壺の底がぬけてしまつた。不具者は失望したやうに頭を兩足の間に引き入れたまゝぢつとしてゐる。と櫓の窓からのぞいてゐた美しい女は耐らなくなつたやうに吹き出してしまつた。そして何うしても笑ひが止まらないやうに横腹を抑へてむせびながら笑つてゐた。

「オヤ何んでございますか？」

不具者に氣がつかなかつた侍女の一人が驚いてこう訊いた。女は猶も笑ひながら指で地上をさして見せた

丁度其時女の笑ひ聲が聞ねたので、不具者は突然後を向いてぢつとその方を見上げた。女は其を見ると小さい叫び聲を上げてあはてゝ窓を離れた。そして恐ろしそうに身震ひをした。不具者の顏が餘り醜く恐しかつたので。焦茶色をしてゐる皮膚の中に眼が大きくぎろりと光つて如何にも腹立しそうにぢつと睨みつけてゐた。女は再び窓から外を眺める氣にもならないので急ぎ足に下の方へ下りて行つた。二人の侍女が其に從つた。

女は平原君の最愛の寵妃であつた。生來優しい性質であるのに、常に何人をも愛して行こう誰も憎むまいと努めるので、すべての人から尊敬せられ愛せられてゐた。其に聲もその性質と似合つて美くしくものごしもしとやかに、女として何處にも非を打つ處がなかつた。兎角妻妾の間には嫉妬怨恨の情が起りがちのものであるが、此の女だけは誰からも妬まれもしなければ怨まれもしなかつた。其で平原君も二なきものとして女を愛してゐた。日々の劇務の勞れも彼女の爲めにすつかり忘れて、朝毎に女に送られては新しい力を以つて表の間へ出て行く。彼女によつて慰められる時、繁雜な劇務も困難な問題も少しも苦にならなかつた。女の美くしい圓滿な性質によつて、平原君も圓滿な人間となる事が出來たのであつた。

不具者も平原君に使はれてゐる一人であつた。平原君は始めて此の醜い不具者にあつた時一寸不快な感じがした。不具者は是非城内に於いて呉れ、そして何かの役に立たして呉れと願つた。平原君は此んな不具者が何になるものかと思つた。けれどもそんな事で人の價値を定めるのはよくない事だと思ひ返へした。不具者は並の人より一層憐んでやらなければならない、此の男の容貌の醜い事も不具者となつたのも決つして彼自身の罪ではない。そんな事で自分の感情を左右するのはよくない。兎に角何んの役に立たないでもいゝ置

いどいてやらう――そう思つて彼は不具者を城内に止めて置く事にした。其から不具者は他の人達の仲に交つて生活する事になつた。多くの人達も此の不具者を憐んでよくいたはつてやつた。不具者も外貌の醜いには似合はず正直ないゝ性質を持つてゐた。すべての生活は圓滑であつた。かへつて此の不具者を置いてやつた爲め他の人々の平原君に對する信頼の情は一層增した。不具者もこのやうな主君を見出し得たのを喜んで此上もない幸福だと思つてゐた。平原君の名聲は此の一事で一層上つたやうであつた。

その翌日いつもの通り平原君は表の間へ出て多くの臣下と共に政務を處理した。群臣は其々の役目に從つて、あちらこちらへ一團となつては急がしそうに働いてゐた。そしてはるか奥の一段高い所へ控へてゐる平原君の所へはひつきりなしに書類のやうなものが持つて行かれた。口頭で何事か報告してゐるものもあつたなどで、騷音雜音がそこにもこゝにも渦を卷いてゐた。其に天井が低く入つてゐる人の數が多いので、隨分廣い建物ではあるがむつとするやうな人いきれや臭ひが充滿してゐた。

昨日の不具者も其等の人の中に交つてゐた。併し彼は他の人のやうに急がしそうでも愉快そうでもなかつた。隅の方に這ひつくばつて例の如く股の間に頭を突つ込んだまゝぢつとして何か考へ込んでゐるやうだつた。時々頭をあげてはあたりを峻しい眼でぢろりと見たりした。そして何時迄も動かなかつた。一人がその傍によつて親切に訊いた。

「何うしたんだ。ばかに沈み込んでゐるじやないか。何か心配でもあるのかい。」

「……」

不具者は頭をあげて白眼勝ちに一寸睨んで又頭を下げた。
「何故云つて呉れないのだ。俺は心からお前を氣の毒な人だと思つてゐる。俺は何うかしてお前の爲に盡してやりたいと何時も思つてゐるんだ。俺はお前が心配そうな風をしてゐると氣になつて仕事も出來やしない。だから何がそんなに心配なのか云つて呉れ給へ。」
「別に心配な事もありやしない。」
氣難かしげにひくい聲で不具者が答へた。
「其じや何うしてそんなに考へ込んでゐるのかい。俺はお前の友達じやないか。俺はほんとうにお前を愛してゐるのだ。だからお前がいつもと樣子の違ふわけを聞かして呉れ給へ。」
「重大な問題があるからさ。」不具者はぶつきらぼうに答へた。
「エッ？重大な問題？何んだ其は？」
いつのまにか不具者の廻りに集まつて來た人々の中から一人がせか〳〵した調子でこう訊いた。
「俺達みんなの名譽に關する事なのだ。」
不具者は相變らず頭を下げたまゝ低い聲で答へた。
「ウム！其は重大な事だ。名譽は僕等の生命だ。名譽は僕等の人格を認識せられる事によつて生ずる。名譽を無視される事は我々人格の否定だ！」
若い聲で興奮してこう叫ぶものがあつた。
「待て々々そんなに憤慨しても未だ事情もよく分らないじやないか。一体何うしたわけなのかい？云つたら

何うだ。お前は俺達の名譽に關はる事だと云つたじやないか。」

又一人が若い者を制しながら不具者に訊いた。

「俺はその事を考へてゐるのだ。皆の意見を聞こうか何うかと。事件は俺一人に關する事なのだ。だから自分一人で始末をつけるのが當然な事だとも思つてゐる。」

「併しお前一人に關する事が他人に影響を及ぼさないとは限らない。まして俺達は互ひに理解し合つてゐる友達ぢやないか。だからその事情を云つたら何うかい？」

「そうだ俺達はすべての事につけて互ひに力にならなければならない。」

こんな言葉が人々の口より洩れた。すると不具者は黑い醜い顏にひきつるやうな笑をかすかに浮べて。

「有難うお前達の心はよく分つた。其では是から俺と一所に御主君の前に行つて俺の云ふ事を聞いて呉れ。」

こう云つてあたりを見廻すと周圍の人々は口々に同意を表してその中の一人は直ぐに不具者を脊負つて平原君の前に連れて來た。そして大勢の人々はその側に默つて控へた。嚴肅な空氣が一同の間を支配した。さつきからの樣子を見てゐた平原君は何事かと胸を轟かせながら事情を問ふた。で不具者はしはがれた聞き取れない程の低い聲でぼつり〳〵述べ始めた。

「私は御覽の通りの醜い片輪です。私は生甲斐のない者かも知れません。併し私は他の人と同樣に天から存在を許され一個の人間です。片輪といふ悲しい運命のもとに苦しい經驗をなめるために生きる事を許された人間なのです。私は外形は片輪であつても心迄も片輪ではありたくありません。私は弱い人間なのです普通の人と競爭する事は迚も出來ないのです。併し私の中には一つの意志力があります。私は是を以つて

何人にも負けない人間となりたいのです。又感情があります。其ははげしい感情なのです。併し私といふ醜い人間を美くしくするものは是です。此の點では私は他の人と同樣に美くしいものだと信んじます。智識も覺束かないながら人並には持つて居ります。是等の者は私といふ人間の內なるものをつくつて居るのです。私の醜い外形が私を作つてゐるのではなくて私の內なるものが私を造つてゐるのです。此の事は私の御主君にも亦私の友達である皆樣にも分つてゐる事と思ひます。……私が御主君にお仕へしてから又皆樣と御交りしてからもう一昔しにならうとして居ります。そしてすべての人が私を了解してゐて下さいます。私の外形の醜さも皆さんとの交情を妨げは致しません。そうです、そうして始めて私に與へられた運命も開拓せられるやうになつたと云つてもいゝのです。所で私は昨日川に水を汲みに行きました。此のやうな不自由な身体ですから、水を汲もうとする拍子に壺を石で割つてしまいました。その時笑ひ聲が聞ゐるのです。其は如何にも愉快そうな美くしい聲でした。そして背後の上の方から聞ゐるのです。私はふと後を見上げました。すると高樓(たかどの)からあの御主君の一番御愛しなさる方がこちらを指して笑つてゐらつしやるのです。勿論お顏もお美くしいし、御氣性もお優しいといふ事は私はよく存じて居ります。併私の頭にはふとあるものが疾風のやうに通りすぎました。其はあの方も人間であつて私も人間だといふ事です。私とあの方を較べると晝と夜よりも、雪と墨よりももつと違つてゐるでせう。只さへお美くしいのに御心もお優しい、其に御主君の御寵愛を得て內外の官女宮人達から上もなくかしづかれてゐらつしやる。所が私はこのやうに醜い上に片輪です。碌な仕事も出來ません。私は到底あの方の足下にもよる事の出來ないものです。併しこゝにあの方と私と只二人立つて居ります時、二人共人間であるといふ事に變りはありません。

人間である以上私はあの方と匹敵して戰ふ事が出來ると信んじます。あの方は私を指さして笑つた。併し私は自分自身を嘲笑に價するやくざな動物だとは思はないで、其は一個の人間が一個の人間に戰を宣したのだと思ふのです。平たく云へば私を侮辱したのです。私の人格を認めて下さらないのです。其は私に取つて甚だ憤滿に耐へない事なのです。あの方の内なるもの其によつて人々から愛せられるものは私自身の内にもある筈です。私は自己を賤められる筈はないと考へます。畢竟あの方は私を嘲笑するだけ驕慢になつてゐると思ひます。そしてその原因は――それは御主君にあると思ふのです。あの方と私との平均を破つのは御主君なのです。」

森として一づにきいてゐた一坐の人々の間には此の時少しざわめきが起つた。そして

「ですから私はあの方のあのお美くしい首が頂きたいのです。その時あの方と私との内なるものは同一の位置にある事が出來ます。」

と云ひ切つた時、騷ぎは一層激しくなつた。其は人々の口から取り〳〵に賛成の聲や讃嘆の叫びやが一時に吐き出されたからである。平原君はその騷擾の中にあつてうつむきながら默つてゐた。彼の顏は異樣に緊張してゐるが、その感情は面に現はさなかつた。併しその心の中にはまとまりのない考へが渦を卷いて混亂してゐた。第一此の不具者が何を要求してゐるのかといふ事さへも分らなかつた。「女の首を呉れ。」と云つた併し其は何ういふ意味なのか分らなかつた。まして何故不具者がこんな大それた事を申し出なければならないかが分らなかつた。彼は只何んだか强迫されるやうなある恐ろしい者に面したやうな、そして其に壓伏されるやうな氣持がした。彼の心は此の多數の者に壓倒されるやうな氣持がした。それで突然立ち上つた。一

「お前達は何故默つてゐるのか――ほんとに知らないのか。」

平原君はせきこんでこう叫んだ。とその時一人――その才能と勇氣と廉潔とで彼に最も重要せられてゐる男が思ひ切つたやうに重々しく力强く且つ靜かに云つた。

「御主君は私共を人間として認めて下さる事を證據立てる爲めに、最も御寵愛なさる妃の首を私共に示して下さらなければなりません。只其たけです。」

瞬間平原君は電氣にでも打たれたやうに全身に戰慄を覺えた。「矢張りそうだつたのか。」と云つたやうな、そして諦らめに似た感情が心の底に湧然とわき上つた。何んだか落ち着いたやうな氣持さへした。再び沈默が續いた。彼は氣が拔けたやうにぼんやりと立つてゐた。やゝ暫くして。

「分つた」

と吐くやうに云ひ捨てると、夢の中ででも歩いてゐるやうにして出て行つた。そして直ぐに近侍のものを呼んで獄官に彼の最愛の寵妃に對する死刑執行を云ひ渡すやうに命じた。

「今晩眞夜中に殺してしまふのだ――わしの寢てゐる間に……」

そうつぶやくやうに云ふと近侍の者が一言も口をきくひまもなく部屋を出て行つて、自分の部屋に誰も入る事を固くとめて只一人寢についた。彼にはすべての氣憶が頭腦から離れてしまつたやうに感じた。眼の前には絶えず白い物がちら〳〵してゐるやうな氣がした。眼をつぶつてもまぶたがぴく〳〵動いて、强いて閉ぢやうとすれば益々獨りで開くやうであつた。

彼の心は不安であつた。何か知ら落ち着かないものが胸の底にあつた。其でゐて安心したやうな、「なるや

うになつた。」と云つたやうな落ち着きの情が表面を支配してゐた。併し何んによつて然うなのか。何が自分を不安に導びくのかといつたやうな事については少しも考へられなかつた。そしていつの間にかすべてを忘れてしまつたやうにぐつすり寢込んだ。

ふと彼は眼をさましたあたりはしんとして燈火が薄暗かつた。陰慘の氣が部屋の中に滿ちてゐた。確かに何か聞いたやうな氣がした——彼は耳をすました。突然起された時によくあるやうに、一寸心がぼんやりした。が直ぐに精神をある一つのものに集中した。聞ゐる。確かに聞ゐる。闇を縫うて細く長く——いつ迄も續く。彼は耳をすました。未だ聞ゐる。極めて細くかすかに。彼は上半身を起した。「オ、あの女の聲だ！」——と突然その聲は絶ゐ入るやうに消ゐた。彼は床の上にどうと倒れた。そして叫んだ。

「美くしく弱い者は遂に亡んだ。醜い併し強い者が遂に勝つた。其があの不具者の云つた人間なのか。」

其から一ケ月後さきに平原君を捨てゝ去つた多くの臣下は皆彼の膝下に歸へつて來た。更に多くの人々が彼の德を望んでやつて來た。彼の國は以前にも倍して盛んとなつた。併し彼の心はあの時以後いつ迄も冷く淋しく且つ悲しかつた。

——(五月十七日)——